

【神奈川】「ポイントは小型機器とIT」検査が重要な眼科で在宅医療を行う方法-菊地琢也・菊地眼科クリニック院長に聞く◆Vol.2

2022年11月11日（金）配信 m3.com地域版

機器と検査が重要な眼科で在宅医療ができるのか——。2014年の開業時から在宅医療を行う「菊地眼科クリニック」（川崎市幸区）の菊地琢也院長によると、小型の機器とデジタルデバイスを活用すれば可能であり、病気のスクリーニングを図れるという。在宅では小手術も行えるというが、心構えとして「留意したい」点も。眼科在宅医療を行ううえでのポイントを聞いた。（2022年9月26日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



菊地琢也氏（クリニック提供）

——先生は2014年の開業時に在宅医療を始め、現在120人ほどを訪問しているとのこと。眼科で在宅医療を行うクリニックは当時珍しかったと思いますが、どんな流れで患者が増えたのですか。

積極的に地域に出向いたことが良かったと思います。振り返ると、医療機関が在宅医療を推進していくには外来のように受け身のスタンスでは難しいのではないのでしょうか。

当院ではまず、医療関係者との顔つなぎを地道に行いました。近くの川崎幸病院が主催する市民講座やケアマネジャーの集まりなどで講演し、それとなく当院が在宅医療を行っていることを伝えました。在宅医療の起点となりやすいのは、患者さんやご家族の窓口となるケアマネジャーです。この職種との関係ができていくことで、「こんな患者さんがいるんだけど診てもらえないか」といった相談が増えていきました。

在宅医療を行っているのは多くが内科の医師ですが、在宅医療の対象となりやすい高齢者はさまざまな病気にかかりやすい特徴があります。内科医が対応しづらい眼科に特化したニーズもあるわけで、それは高齢化の進展で増えているように思います。施設訪問については、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に伴う感染対策の点から一時的に依頼が減りましたが、最近はまだ増えていますね。

——眼科では機器を使った検査が重要になると思います。そんな特徴がある診療科で「うまく在宅医療ができるのか」と疑問に思う医療者もいるのでは。

機器とデジタルデバイスを活用すれば、眼科でも在宅医療を行うことは可能です。今は機器の進歩で小型のものもあるため、それらを患者さん宅や施設に持って行き、タブレット端末のアプリも使うことで各種検査をスムーズに進められます。

訪問時に主役を担うのがハンドタイプの細隙灯顕微鏡で、あとは必要に応じて小型の眼圧計やピント測定器も使います。緑内障と加齢黄斑変性症の早期発見に有効なOCT（光干渉断層計）と視野計も今は在宅で使えるものがあるので、購入しました。外来で使うOCTと視野計は一般的に機器とデスクトップパソコンがセットになっていますが、在宅用に使うものは機器にモニターが内蔵されており持ち運びやすくなっています。



同院の機器で視野検査を受ける施設入居者（クリニック提供）

——タブレット端末のアプリも使っているそうですが、具体的には。

まだ特許出願中ですが、視力検査に使えるアプリがあります。医療機関で検査を受けるときにスクリーンにCのマークが表示されますが、あれと同じことをタブレット端末で再現できます。ほかにも加齢黄斑変性症に特徴的な視野のゆがみがないかを調べる検査や色覚検査を行えるアプリもあります。

——工夫次第で眼科でも在宅医療が可能だと。

そうですね。眼科では患者さんが言われる「見えない」原因を把握することが大切であり、小型機器とデジタルデバイスの活用で相応のスクリーニングを図れます。

ただ、外来に比べると機器と検査・治療内容に制限が出るので、診療の質は下がりやすくなります。例えばOCTを携行できるようになったのは進歩ですが、それでも機器は約20キログラムと重く、持ち運びは楽ではありません。外来用に比べて機能は落ちますし、患者さん宅によっては検査の実施が難しいこともあります。そもそも機器を置くスペースがあるか、機器を置く際に室内の椅子やベッドの高さと合うかなどの点で問題が起こることがあるためです。一方の施設では、入居する複数の患者さんに一カ所に集まってもらいまとめて検査できることもあり、機器を持っていることの優位性を高められることもあります。

ほかの診療科で在宅医療を進めるうえでも言えることかもしれませんが、「どんな工夫をして診療の質の下がり幅を減らすか」が医師には問われるのではないのでしょうか。

——在宅で行える手術もあるとホームページに書かれていますね。

まぶたの中に小さなしこりができる霰粒腫（さんりゅうしゅ）や逆さまつ毛などは患者さんのご自宅でも手術可能です。逆さまつ毛は、加齢によって肌のはりがなくなることでまつ毛が眼球の方に入り込んでしまう状態であり、目やにが出やすくなります。内科の先生が抗菌薬で対応しようとするケースが見られますが、原因はまつ毛にあるので再発してしまふことがあります。

当院では根本的に治療してあげたいと思い、在宅下でも手術を行っています。逆さまつ毛の手術は白内障などの手術に比べて感染リスクが低く、手術用ルーペに針と糸があれば行えます。

◆菊地 琢也（きくち・たくや）氏

2000年東海大学医学部卒。2004年昭和大学大学院修了。昭和大学病院や総合高津中央病院などを経て、2014年に「菊地眼科クリニック」を開院。開業時から在宅医療を行っており、2021年には理学療法士による訪問リハビリテーションも始めた。日本眼科学会眼科専門医、昭和大学眼科兼任講師など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

